

病院は施設から「家」の時代へ

持論 時論

デザインで人を元気にする

「ドムスデザイン」代表 戸倉蓉子さんに聞く



大学病院の看護師から転身した1級建築士というイタリヤ政府認定デザイナーがいる。「環境を通じて、人を健康にさせる」ことをミッションに、女性スタッフばかりの建築デザイン事務所を率いる戸倉蓉子さん(ドムスデザイン)代表だ。医療現場におけるデザインの重要性などについて聞いた。

当たり前で、食事も美味しく感じられませんか。本当は食事を取って「頑張る」と、前向きな気持ちにならなければいけないのに。環境をデザインで美しくすると、働く人の気持ちも豊かになります。そうすると、自然に患者さんに笑顔が向くようになります。患者さんも幸せになります。ハードをきれいにしても、働く人の気持ちが付いていかないと本意の意味で、病院のホスピタリティは高まらないのです。だから、バックヤードの環境は非常に大事ですが、そこにも目が向けられてきませんでした。私たちの仕事は、大手の設計会社と組んでやるケースが回復に必要な環境が分らない

以前は看護師だったそうですね。

小学校の時、ナイチンゲールの伝記を読み、小学校の卒業文集に「私は看護師になりたい」と書きまして、その通りに看護師になりました。大学病院の小児内科に配属になりました。20年以上も前のことです。

しかし、病院は暗く殺風景。そんな環境に毎日居るなんて、健康な私も気持ち悪くなってしまいました。ましてや、元気がなければいけない患者さんが元気がない環境にいることって疑問を感じていました。

転身のきっかけは、白血病の小学生の担当になった時のことです。苦しい闘病生活で彼女はまた笑顔を見せません。ある時、元気を与えたいと思って、好きだというガーベラの花をベッドサイドに飾ったら彼女は看護師さん、ありがとう」と笑顔を見せました。その時初めて、人は病で

環境で豊かになるホスピタリティ

医療を核にした地域創生



検診も楽しくできるようにテマパークのような病院を目指してデザインしたラウンジ(黒沢病院附属ヘルスパーククリニック)

めにはイタリアに留学したそうですね。イタリアでは車椅子が鮮やかな赤だったり、杖一つとっても健康な人でも使っていたり、なるようなおしゃれなデザインが多い。日本にもおしゃらなくて、ときめくものもあってきたらいいな、という思いで研究しました。家のデザインでも工夫すれば、意識改革になって若返ります。元気だからオシャレをするのではなくて、オシャレするから元気になる、デザインは予防医療の観点からも重要です。超高齢社会になって、病院に求められる役割が変わってきています。これまで病院は外科が花形でしたが、これからは内科のあり方が重要になります。超



壁一面に掘越手松氏による生命の喜びを描いたラウンジ(シノウミックス・ウェルネス館(黒沢病院附属健康館))

くなのです。建築デザインを学んだように、政府は「地域包括ケア」を目指しています。終末期家で暮らすようにするというのが国の方針。つまり、病院に家が入り込む一方で、家に医療が入り込むわけですが、日本の住宅で看取れる環境はまだありません。また、地域包括ケアとなるべく、病院と家の環境が同様でないといけないので、そうなので、病院と家の環境をつなげるデザインも必要になってきます。

高年齢者が人生の最期まで住み慣れた地域で暮らし続けることが望まれます。

高齢社会に加え、先進医療の発展に伴いがんも切らずに暮らす時代になってきたことを考えると、手術して回復と急慢性期対応から慢性期への対応となるでしょう。慢性期は何年もかかり、場合によっては一生になることもあります。その環境で大事なことは「家」という発想です。つまり、考え方を施設から家に変える必要があります。病院を「家」にしているのがドムスデザインの主眼点です。具体的には、家としての生活の場です。食事をする、寝る、というところが病院でもストレスなく暮らすようにしています。